

大阪体操協会理事研修会（2024/5/7）

於：梅田芸術劇場メインホール

東宝ミュージカル「王様と私」

名誉会長 山田 正夫

この度は、エンターテインメント性と芸術性が融合されたまさに後世に語り継がれるべきミュージカル作品「王様と私」を観劇出来たことに感謝しています。

「王様と私」は愛に満ちたデュエットや美しいバラード、大規模なアンサンブル、また素晴らしい名曲の数々など時代を超えて愛される不朽の名作です。

ミュージカル初出演の北村一輝さんと明日海りおさんのコミカルで絶妙の掛け合い、また後半の王様とアンナが軽やかに踊る「シャル・ウィー・ダンス？」から展開する数々のシーンに感動し、あっと言う間に終わった感がありました。

東の宝塚として「東宝」と名付けられた東宝演劇の最大の特徴は「芸術性」と「大衆性」の融合とされています。東宝のミュージカルは、その時々「東宝芸能株式会社」に所属する俳優や、他の芸能事務所に所属している俳優などがオーディションによりキャスティングされます。そのオーディションは熾烈を極め、かなりの難関であると聞いています。その結果、ミュージカル、ストレートプレイともに、文学、美術、音楽、ダンスなどあらゆる芸術の要素が必要とされる「総合芸術」として、誰にでも楽しめる娯楽性の高い作品に生まれ変わると改めて感動したものです。

格式ある梅田芸術劇場メインホールに相応しいオーケストラに加えて、舞台装置や衣装デザイン・照明や音響など、前回の常務理事研修会「アレグリア」同様に「体操とエンターテインメントの融合」、「新たな光」を学ぶことが出来たのではないのでしょうか。

なお、本公演には、私の教え子で梅花歌劇団出身の笠行真綺がアンサンブルとして出演しています。よく頑張っているなあと感動の拍手を送ります。

副会長 市田幸治

これまで ユル・プリンナー、市川染五郎（現松本白鸚）、松平健と錚々たる役者が演じてきた「王様」を北村一輝がどう演じるのか楽しみにしていました。「テルマエ・ロマエ」の印象が強く少し心配していたが、なかなか凛々しく人間味のある王様でした。また、チャーミングで可愛らしい王様でした。席が遠くて表情まで見られなかったのが残念でした。アンナ役の明日海りおは、本当に美しく品があって聡明でチャーミングな先生でした。歌声も素晴らしくお茶目で可愛らしかったです。どの役者さんを見ても洗練され歌もお芝居も踊りも凄いと思いました。特に感動したのが、チュラロンコン王子・息子のルイスをはじめとした王子・王女を演じた子供達です。小学1年生から中学3年生までのようですが、可愛らしくあり、また大人顔負けの落ち着いた素晴らしい演技でした。独特のタイ舞踊もよかったです。家に帰りプログラムをよくよく見てみると、どの役者さんも凄い経歴で、お芝居・歌・バレエ・ダンス等々精進され成し遂げてきた人ばかりでした。子供達においても早い子は、0歳からお芝居の取り組んでいるようです。お芝居・歌・ダンス・ピアノなど超英才教育を受け、各方面でも活躍しているようです。まるでジュニアの選手が、3歳4歳から体操を始め小学生がオリンピック選手顔負けの演技をするかのようなようです。

楽曲・舞台美術・衣装・振り付けにおいても本物を求めて、タイに出向き研究・研修をしてきたようです。全てにおいて妥協せず、最高の作品を作り上げたようです。だから観客が感動するのだと思う。また、随所に笑いをとるのがエンターテイメントなのでしょう。我々体操人にとっても学ぶべきひと時であったと思います。

.....



理事長 武田庄治

この度、役員研修会での芸術を学ぶ一環としてミュージカル『王様と私』を鑑賞させて頂きました。

今までサウンド・オブ・ミュージックやウエスト・サイド物語、「Shall We Dance?」など映画でしか知らないミュージカルの世界でした。しかも「芸術を学ぶ」の観点からは最初の体験でした。

今回の主演は北村一輝・明日海里お、演出は小林香。世界が称賛する有名な作品の見事な演技に触れて、感動と興奮を覚えました。

チャーミングで人間らしい王様を表現した北村一輝、王様よりもたくましく、勇敢で、繊細に人を思い遣ることのできる愛の人を表現した明日海里お、二人の「阿吽の呼吸」が見事に人間ドラマが浮かび上がる作品として表現されていると思いました。

作品の成功は、主役はもとよりドラゴンチーム・エレファントチーム（子役）を含むプリンシパルキャスト陣、裏方で支えるスタッフ陣が、「演出者の思い」を見事に表現できるかだと思いました。

私たち大阪体操協会の役員としての役割を考えますと、演技者が発表の場として最高の演技が出来るように「最高の場所」・「最高のコンディション」を整えて、審判の「最適な評価」につなげる事かなと実感した次第です。様々な諸問題を抱えておりますが、今後の大会運営やイベント企画の心構えとして肝に銘じたいと思います。有意義な研修会を有難うございました。

.....

常務理事 井上直也

ミュージカル「王様と私」を観て感じたことは、体の動き、手の動き、顔の動きなどの「所作」からいろいろなことが伝わってくるものなのだということでした。

王様の子どもたちが家庭教師の先生に自己紹介をする場面では、役者の子ども
のしぐさ、所作によって、「この子は恥ずかしがり屋なのだろうな」とか、
「好奇心が強い子なのだろうな」とか伝わってきました。これらは私たち観客
のために強調して演じている動き、所作であり、そう見えるようになるための
動きを学び、動くことができるように稽古を積むことでこのようなパッと誰が
見てもわかりやすい所作ができるようになるのだろうなと想像しました。他の
演技を見ている王様の大きな声に観客のみんなが圧倒され、静かになった
り、面白い仕草に笑いが起こったりした場面がありましたが、観客を魅せるた
めの体の動きや声量、声色などにもテクニック（わざ）があるのだろうなと想
像できました。

体操でも試合、演技のために技を練習しますが、このような芸術、舞台、ミ
ュージカルで演じる役者の方々も一つ一つの所作＝わざをたくさん稽古、練習
して身につけているのだろうなと思いました。そして、観客のみんなが惹きこ
まれる演技というものは、役者の稽古によって洗練された素晴らしい動き、振
る舞い、声などが元になっているのだろうなと思いました。芸術の「術」も
「わざ」と読めます。この「わざ」を磨くことで観客である私たちに感動を与
えるわざ、演技、演劇になるのだろうなとすることができました。これは体操
競技をはじめスポーツ全般にも共通することだとも思いました。

私たち大阪体操協会の役員としてできることは、こういったミュージカルや
演劇でいう音響や舞台装置などを動かす裏方のような役割、つまり、選手、コ
ーチが日々努力を重ね創り上げた素晴らしい演技を発表するに相応しい場を提
供し、見に来る人たちに良かったと思ってもらえたり、感動してもらえたりで
きる運営を工夫していくことだろうと思いました。

.....



常務理事 藤原 美紀

今回、研修会に出席できなかったため、個人的に観劇し学ぶ機会とさせていただきます。「王様と私」を観劇し、物語と音楽のすばらしさに名作といわれるゆえんを感じました。世界でヨーロッパの植民地とならなかつた5ヶ国中における一つの国であったタイの王様として判断を迫られる。欧米のことを学び、文化や習慣を大切にしながらも変化しなければならない。原作を大切にしながら、現代の感覚にもあうような工夫も随所にみられることも必要な進化という作品のテーマにあっているように感じました。

当時の時代背景と現在は異なるものの、変化の大きな時代、外的要素も大きく変化する時代、進化し続け、異分野、異文化を受け入れることで未来が開けるといふまさに現在の世界の状況を表していると感じました。

スポーツ界、体操界においても、少子化をはじめ様々な影響を受け従来の考え方だけで世界の頂点にいることのできない中、変化や異なるものとのコラボレーションによる新しい価値の創造はテーマを同じくしていると感じました。

体操の高度な技を、競技とは別に、エンターテインメント化させ、楽しみながらミュージカルのようなストーリー化や説明ではなく理解できる演出的要素が加わることで、新たなファン獲得や未来の選手たちの獲得につながるように感じました。

様々な芸術に触れることで触発され、スポーツの様々な可能性が開かれることが見えるように思いました。このような研修会が開催されることの意義をあらためて感じました。

さらなる発展を願って。

.....



常務理事 濱本 匡

この度は、個人ではなかなか鑑賞することができない作品を観る機会をいただき感謝いたします。

日頃は、ダンスなどのパフォーマンスで様々な表現を観る機会がありますが、ミュージカルは久しぶりでした。

王の立場が、素直に時代の背景や文化の違いを受け入れられない様子、そして他国からの侵略の脅威に苦悩する姿がわかりやすく表現されていました。また、王本来の思いも「Shall We Dance?」で踊るシーンで表現されておりこの「わかりやすい」がすばらしいことだと思いました。

カーテンコールでは、北村一輝さんが本日千秋楽を迎えた子役たちに対し、稽古から本番までの取り組みを労い一人ひとり自己紹介をさせていました。

子どもたちは、今までの取り組みと最後までしっかりと演技できたことに満足と充実感でいっぱいだったことと思います。そしてこのカーテンコールは、きっと一生の思い出になったと思います。

体操協会では、大会を円滑に進めるためにクラス毎に表彰式を実施していますが、時間が限られている中でも表彰の対象となった選手たちにその頑張りを称え、満足感を与えられる表彰式の運営に心がけたいと思います。

.....

常務理事 芳野 操

表現とは何か？

人のこころを引き付けるのは 虜にするのはどんな時か？

歌と踊りとお芝居で1つの作品にするには演技者の年齢・男女・その人の持つ特徴をいかに素晴らしく表現するかだと思いました。

この作品はとても上手に配役されていたように思いました。

また、演技を盛り上げる舞台装置・衣装・持ち物まで配慮され、効果があつ

たように思い、とても重要だと感じます。何事も周りから細かい事から積み重ねて行かないと人は振り向かないのではないか？

これからもしっかりと目の前の事をやっつけていこうと思いました。

この機会をくださってありがとうございます。

.....

理事 吉村 慎介

久しぶりのミュージカル鑑賞であり、映画やドラマで知っている俳優さんが出演している事で、気がつけば純粋にミュージカルを楽しんでしまいました。途中で今日は研修の観劇と思い出しましたが、楽しみの方が勝っていたように思います。その中でも気がついたことや、大切だと思うことを二つあげたいと思います。

まず、演者さんと観客の一体化です。さすがプロの俳優さんたちで、演技も歌唱も素晴らしいですし、長い歴史のある演目なので場面の変化や演出なども出来上がっていました。劇そのものもよかったのですが、観客の皆さんの様子も印象に残っています。

歌唱が終われば拍手がおこり、緊張した場面では静まりかえり、ウィットにとんだ会話では笑いが起こります。ミュージカルを一緒に楽しみたいという雰囲気劇場内にありました。観劇の約束事をよく理解されており、気持ちよくストーリーが進んでいきます。

当たり前ようですが、このような公演や催しが成功するためには大切な事だと改めて感じました。

演じる人と観客が一体となることで、わくわくしたり、終わった後の心地よい余韻につながるのだと思います。

これは私たちが携わっている体操協会の各事業にも、そのまま言えることではないでしょうか。実力のあるパフォーマーと観客が両方育っていけるような運

営が必要だと感じました。私は具体的な方法はまだわかりませんが、体操ファンの掘り起こしは急務だと思っています。

二つ目は劇場スタッフの皆さんの専門家としての動きです。開場前の案内から、入場の誘導や座席への案内、パンフレット販売など役割分担が明確で、頼れる存在であったと思います。公演への期待や主催者への信頼につながるものがあります。これらも見習わなければいけない要素ではないでしょうか。

考えはじめると、身の回りには学ぶべき事柄がいっぱいあることに気づきました。特に今回のような生の芸術公演は、我々の活動と共通面が多く、参考になることも多いように思います。今回の研修はこのような経験をさせていただいて感謝しています。

.....

理事 増田 桂子

久しぶりのミュージカル鑑賞でとても高揚して劇場に行きました。多数の方々が並んで入場を待っているのを見て益々高揚しました。ストーリーは知っていらっしやると思いますが、1860年代（現タイ）のお話です。植民地化を図る欧米列強が迫る中、国王は国の将来を背負う子供たちに西洋式の教育を受けさせるためにイギリスから家庭教師を向かえます。人一倍頑固で誇り高い二人は対立していましたが互いの聡明さや誠実な心を知り、国籍や身分、性格を超えて人としての信頼を深めていく。

この王は何かを変化させるためには何が必要か考え、次の王、国のためになる先見の明あったと思います。今世の中は色々変化しています。当たり前のようになっていますが、色々な角度から何が必要か見極めないといけないと思います。変化させる事は簡単なようで難しいと思います。何をしたいか、メリット・デメリットを考えてどうしたらより良いものになるか、あの二人のように話をして理解し信頼していけるような人間関係を築こうと思いました。

ミュージカルは美術・演奏・照明・衣装・セリフ・歌声に品の良さ、芸術性を感じました。全ての出演者、特に家庭教師アンナの所作が素敵で見入ってしまいました。今後、芸術性を必要とする競技に携わっている中で丁寧で心のこもった態度で行動したいと思います。このような貴重な体験を企画して頂き感謝します。ありがとうございました。

.....

理事 脇川 章

今日まで私にとって、ミュージカル『王様と私』と言えば、名優ユル・ブリナーの 代名詞のようなものでした。

日本では、1990～1991 年に現二代目松本白鷗が王様役を務め、イギリスに招聘され、200 回以上も主役を務めました。その後、主役の王様は、渡辺健（ニューヨークで上演）、高嶋政寛に引き継がれ、今回北村一輝が見事に主役の王様を演じ切りました。相手役の明日海りおも、素晴らしい演技で観客を魅了しました。

終演後、梅田芸術劇場メインホールを埋め尽くした約 1900 人の観客は総立ちのスタンディングオベーションで拍手喝采を送り、出演者は三度のカーテンコールでこれに応えました。もちろん私も手のひらが痛くなるほど拍手を送りました。

今回、これ程素晴らしい舞台の鑑賞の機会を与えていただき心から感謝いたします。